

第1回カリキュラム検討委員会 議事要旨

■説明事項に対する質疑等

松本委員：入試あるいは技術認定に相当するようなチェック機構はあるのか。

事務局：想定している。ある程度栽培経験のある人に来ていただくための入学試験などを考えている。

松本委員：確実に有機農業の技能を習得されましたという証明書のようなものを出されるのか。

事務局：そのようなイメージを持っている。

■検討事項に対する質問・意見等

新井委員：募集する学生のレベル感はどのように想定しているのか。

事務局：学生一人ひとりにハウスと露地ほ場を管理して実習もらうことを想定しているので、なにがしか栽培をやったことがあるという事が最低レベルだと思っている。

新井委員：ハウスと露地を栽培管理していこうと思うと結構なボリューム。例えば慣行農業をある程度やっているけれども有機に取り組みたいので学びたい人や、有機を少しやっているがなかなか成果が出ないので、そこを深めたいという人のイメージでいいのか。

事務局：優先順位としては今おっしゃったような方が第一優先となる。

新井委員：推薦のようなものを考えているのか。

事務局：推薦書をもらうというような形は考えていないが、就農支援センターや普及センターに就農相談に来られた人に勧めてもらうと言うことはやっていく。

中塚委員：高校を卒業して農業大学校に行きたい人の中で、有機農業でやりたい人がいる場合、全然経験がないという理由で難しいのか。

事務局：できれば通常の農大の2年制のコースで、基礎を学んでその後有機コースに来たらどうかという流れになる。

事務局：農大では、実践研修という研修を行っており、家庭菜園などで直売所等の販売経験がある50歳未満の方を対象として、1年間生産物を売るところまでやっていただいている。修了生の75%の人が農家になっている。選抜は面接審査などを行っている。アカデミーは実践研修に習って組み立てている。入試を試験で行うのか、面接にするのか、どのあたりのレベルが必要なのかも相談させていただきたい。

中塚委員：アカデミーは、どちらかと言うと実践研修の枠に入りそうなイメージか。

事務局：実践研修と農大の間みたいなイメージ。

事務局：1,500時間のカリキュラムの900時間は実習を想定しているが、その先生を誰に来てもらって教えたらいいか。そこが今一番困っているのはその点。

松本委員：土壌肥料については、座学と現場が一緒にならないと、学生がかなり戸惑うと思う。実際に大事なものは現場でのこと。

事務局：講義と言っても座学だけではなく、実際にほ場に出て土を触る、手本を見て学ぶというような時間も含めて30時間というような設定。

池上委員：私が営農している場所であったり、やり方であったりという中では、ハウスであろうが、露地であろうが、その中間のような作り方で行っている。総合的な伝え方が大事と思う。

4月に入学されたときに、いきなりハウレンソウをハウスで作っていくとしても、本当は夏に太陽熱養生などをした上で秋からのスタートの方が合っている。流通でもマスの作り方のオーガニックで行くのか、ローカルで行くのかということも、もっと伝えてあげる事が大事ではないか。

高見委員：ハウスやほ場の設置は、令和8年には完成しているのか。そこから土づくりは始まっている状態か。

事務局：8年度にはできている。ほ場整備が終われば土づくりを始めないといけない。

池上委員：スチームを使うのであれば、残渣は持ち出さず、土に混ぜ込んで、草スチームのように軽くスチームかけて耕したりして後で言う腐植、可給態窒素に繋がっていくという循環型農業がこれからの時代には必要。特にハウス栽培では。

事務局：緑肥は、最初は特に取り組んでいかないといけないと思っている。

松本委員：兵庫県立の有機アカデミーを出たことが卒業生の喜びになる、そうありたいと私は思っている。このカリキュラムでいいけれども、主体は現場で教え込む必要がある。知らないのはやはり有機農業の内容なのだからこれに徹底して特徴のある有機アカデミーを作られることが大きなチャレンジであり意味があること。

新井委員：生産と経営がバランスよく学べるようにしていただきたい。

事務局：県が設置する学校になるので、できるだけ沢山収穫できて経営をしていけるようなやり方を学んでいただく内容をカリキュラムに落とし込んでいきたい。

池上委員：オーガニックに限らず、販売をどう持って行くかというのはこれからの農業の大きな課題。

池上委員：アブラナ科を冬場以外の時期に作るのは難しい。私の地域で残るには、1品目を大量に作るより、ローカル的なオーガニックが残る方法だと思っている。地方からも大量のマスのオーガニックが入ってくるので、規格も同じ規格でやるとやられてしまう。

オーガニック専門店というのが価格も高かったので、弱くなってきている。お店が無くなったり。その分広がってきて大きい所が扱い始め、裾野が広がっている。

安本委員：一般的なジャガイモ、タマネギ、ニンジン、ほうれん草、コマツナなど、誰でも聞いたことがあるような野菜が一番需要としては多いので、それを年中通していかに販売できるかが我々の課題。

あとは、やはり物流。個人でやると宅配便を使うしかないのかとなるが、地域で一緒の便を使って送れるかとか、地域でのつながりを持つことができれば、かなりその経理を抑えることもできる。

中塚委員：東大阪市は農地が4%しか残っていないが、専業農家はまだ120軒くらいある。東大阪市の農産物は、大阪府のエコ農産物にするという作り方をブランドにされた。農協がちゃんと旗振りすることで、東大阪市のエコ農産物の申請件数がびっくりするほど伸びている。

農大で土づくりから関わっているの、どうやって土づくりをしてきて、どんな所からできた野菜なのかを言えると、ここで実習をすることの意味があるし、せっかく土に詳しい方や販売に詳しい方など専門の方がおられるので、両輪でブランド化していけるのではないかと思う。

せっかく販売・マーケティングの講義があるので、消費者と関係を作りたいという人が、ちょっとでも経験できるように、消費者の方に、農大有機農業部門応援団みたいに来ていただいて、援農体験してもらうとかできたら良いのでは。

松本委員：それをカリキュラムに格上げして組み込んだらどうか。

中塚委員：ビデオとかも撮っておいて。

事務局：販売面で、授業の一環として実際に実習生が作った物で農大BOXみたいなものを作ってEC販売させていただいて、実際は商品にならずにはねられるとかクレームがあったとかを学生にフィードバックできたらすごく良いと思う。生きたOJTみたいなになるのでは。

新井委員：現実を知れるという意味ですごく良いと思う。

池上委員：パッキングとかでもすごく違ってくる。

新井委員：まず栽培をし、一般的にどういった所に気をつけないといけないのか、座学では得られない経験値の共有みたいなところがなされて、何らかを体得できて栽培できるとなったときに、今度流通で言ったら、お客様のニーズや店のニーズを吸い上げて、こういうのはできないかとか、これくらいの量感でどうか、という具体的な話はできると思う。そういうのを汲んで栽培すると、きっと栽培も変わってくるので、ただできた物を出すというのではなく、経営を成り立たせるために、いくらで売らなければならないのか、でも需要と供給のバランスがあって売価はある程度限度があるとなった時に、経費をどう抑えていかないといけないのか、生産効率をどう上げて行かななければならないのか、利益はちょっと薄いけど量でカバーするのかとか、そういうのを自分で考えられるような練習というか勉強ができれば良いと思う。

松本委員：耕耘については、非常に両極端。耕耘した方が良いという人もあるし、しない方が良いという人もいる。不耕起栽培がヨーロッパなどで受けているが、日本のような降雨のある気候でそれができるかどうかは結構な冒険となる。

中塚委員：カリキュラムの中で不耕起栽培の話もしてもらおうと選択肢が広がるのでは。

事務局：耕起・不耕起を含め、いろいろな流派があるので、有機農業概論の中で話をして、あると示すことを示して、我々としては有機JASを取っていくという中庸路線を柱にしていく感じ。

事務局：資料4の裏面のオリジナル科目の中に、今日頂いた意見の内容をどのように盛り込めるかを検討・記入して、次回の委員会でお示しして意見を頂く。